

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02294

研究課題名(和文) 身体性の回復と関係性の再構築を支えるホリスティックな家族支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a Holistic Family Support Program to Support Recovery of Somaticity and Rebuilding of Relationships

研究代表者

古賀 聡 (KOGA, Satoshi)

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：00631269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では障害や疾患のある人の家族の身体性の回復と関係性の再構築を支援するホリスティックな家族支援プログラムを開発した。障害児の保護者やアルコール依存症者の家族が抱える疲労感や緊張感などを確認し、身体動作を媒介とする心理療法である臨床動作法の技法を取り入れたボディワークを実践し、その効果について検証した。家族が抱える苦悩や事情については、詳細な説明を求めることが難しく、その点で身体動作や姿勢に表現される心の動きを推測し、より良い心身の体験へと誘導する臨床動作法の効果が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、発達障害児の保護者やアルコール依存症の家族を対象として、安全かつ効果的に緊張感や疲労感の緩和する方法として、身体動作を媒介とする臨床動作法の活用を提案した。これまで障害や疾病、さまざまな心理的不適応のある当事者を対象とした心理療法として活用された臨床動作法を、健康動作法として位置づけ、それぞれの家族のニーズに応じた援助方法について提案した点に学術的、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：For recovery from mental illness and for the healthy development of children with disabilities, it is important to support their families. However, in family support, psychoeducation that promotes understanding of illness and disability is often provided. In supporting families with strong anxiety and exhaustion, we believe that it is important to first intervene in a way that reduces family tension and improves their sense of active involvement, and we attempted to develop holistic family support that incorporates relaxation and body work. In this study, a holistic family support program incorporating the clinical movement method was developed and implemented with families of alcoholics and developmentally disabled children. The families were able to gain a sense of peace, activity, and self-control through the Clinical Movement Technique. The experience of clinical behavior allowed families to acquire effective strategies for coping with stress in their daily lives.

研究分野：臨床心理学

キーワード：家族支援 臨床動作法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

個人の尊厳と生涯発達を支える社会福祉の実践において、障害や疾患のある人に寄り添う家族の心理を理解し、安定した家族関係の回復を支援することは重要である。現在、統合失調症、認知症、アルコール依存症などの精神疾患者の家族支援は、医療の専門家による家族を対象とした情報提供【心理教育】と、家族の相互扶助を目的とした自助グループ【家族会】が2本の柱と言えよう。

医療や心理臨床の専門家による患者家族や障害児の保護者による心理支援としては、疾患や障害に対する正しい知識と適切な対応を助言・指導する心理教育が行われることが多い。医療サイドとしては、患者家族が疾患や患者への対応について正確に理解することを期待する。

しかし、家族はこれまでの介護の毎日で蓄積された疲労感や緊張感などの身体感覚をとまなう強い葛藤や不安を抱えている。これらの身心の極度の緊張感や疲弊感を緩和することがないままに、家族の変化や対応を求めるような支援の限界が考えられる。

風間・本間・八巻(2017)は、介護家族を対象としたセルフケア・プログラムの開発として、マインドフルネス・アプローチを導入した。マインドフルネス・アプローチは、現在、医療、産業、教育を含む広い領域で心身の健康に寄与する方法として注目され、介護家族支援(Kang & Kim, 2014)、慢性疾患児童の家族介護者(Minor et al)等、社会福祉の領域での実践が報告されている。本邦における風間ら(2017)の実践では、日本語版 GHQ (健康調査票)によって測定された心身の健康度は上昇したが、レジリエンスや精神的回復力については変化が示されなかった。

これらの国内外の研究から、家族支援における身体性や主体感覚に焦点化するアプローチの有効性は示されたが、「瞑想」を基盤とするマインドフルネスの実施の困難性といった課題、関係性の回復に必要なスキルの獲得も包摂した家族支援プログラムの必要性が示唆された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、障害や疾患のある人の家族の身体性の回復と関係性の再構築を支援するホリスティックな家族支援プログラムを開発することである。まず、プログラム開発の基礎資料を得るために、危機や困難に遭遇した家族の疲労感や緊張感などの身体感覚、身体意識の状態や葛藤等の心理状況との関連、家族が求める支援ニーズを検証する。ホリスティックな家族支援プログラムの開発として、身体動作を媒介とする心理療法である臨床動作法の技法を取り入れたボディワーク、自己理解と対人関係性を支援する心理劇の技法を取り入れたドラマアプローチによる構成を提案する。プログラムは、募集に応じた調査協力者等を対象とした試行の後に、アルコール依存症、発達障害児者の家族に実施し、その効果を測定しながら、安全かつ効果的な家族支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

家族の身体性の危機を緩和するボディワーク、自己理解や関係性を振り返るボディワークを開発する。臨床動作法、漸進的弛緩法(Jacobson, E., 1929)の技法に加え、身体動作や行為を媒介とする心理劇や構成的エンカウンターグループ等の集団心理療法の技法を援用し、家族が専門家の介入に警戒することなく安心して参加できるための導入の説明、ワークの実手順、フィードバックのマニュアルを作成する。

ボディワークにより身体性の危機が緩和された家族に対して、家族の歴史や現在の家族関係への振り返りとアサーティブな行動形成へと展開するドラマアプローチを組み合わせた家族支援プログラムを開発する。ドラマアプローチは、ロールリバーサル(役割交換法:相手の立場を理解する)、ミラー(鏡映法:客観的・俯瞰的理解を促す)、ダブル(二重自我法:潜在的な感情を外在化)等の心理劇技法を用いる。

4. 研究成果

(1) 重度重複障害児の母親の心理支援

重度重複障害児への動作法の介入と母親へのインタビューを行った。坐位の姿勢保持も難しく、言語的コミュニケーションが難しい重度重複障害児への動作法による介入場面に母親も陪席してもらい母親の子ども理解の支援を行った。重度重複障害児を育てる母親にとっては、動作法課題への取り組みのなかで示される子どもの応答や動作表現は子どもの発達や成長を実感する貴重な時間となることが理解された。また母親自身も動作法の体験をもつことによって、自分の筋緊張に気づきそれを弛める、相手の関わりに応じて動かす、思い通りに動かす、抗重力姿勢を維持しようとする(踏ん張る)非言語的な身体動作のなかに豊かな心の動きがあることを実感し、言語的表現が難しい子どもの心の動きを理解する貴重な機会となることが示された。以上のような重度重複障害児とその母親への動作法を通じた介入支援の意義については、学会で発表をした

【古賀聡(2021)希望をつなぐ 新たなる日常と臨床動作法、日本臨床動作学会第29回学術大会(招待講演)】

【岩男尚美、遠矢浩一、古賀聡(2021)後弓反張姿勢を呈する重度脳性四肢麻痺児への坐位課題を通じた自己身体認識を促す動作法、リハビリテーション心理学研究 47、29 - 41.】

(2) 発達支援のニーズがある保護者のグループ支援

発達支援のニーズのある子どもを対象としたグループセラピーに参加した母親を対象に「親の会」活動を実施した。通常、「親の会」では、親の悩みや困りごとに焦点を当てて、親同士の会話や支援者からの専門的な助言が行われることが多い。しかし、グループ活動に慣れていない親は家庭内の事情にも触れる悩みを語ることへの抵抗や戸惑いも多い。そこで、本研究課題である臨床動作法の課題を用いたボディワークやリラクゼーションを実施したところ、集団に対する緊張感が緩和し、それぞれの保護者が語りやすい雰囲気となることが示された。さらに、リラクゼーション課題を通して、母親自身の身心の緊張感、「肩の力を抜くこと」の難しさに母親たちも気づき、実感的に子どもたちの普段の緊張感やストレスを理解することが可能になることが示された。

【合原弥邑、針塚緑樹、榊原有紀、古賀聡、小澤永治、遠矢浩一（2021）発達支援における「親の会」活動の試み～思春期女兒の母親グループプロセス～、九州大学総合臨床心理学研究 12、47-54.】

【針塚緑樹、合原弥邑、榊原有紀、古賀聡、小澤永治、遠矢浩一（2021）発達支援における「親の会」活動の試み プログラムの試みと母親の反応 -、九州大学総合臨床心理学研究 12、117-123.】

(3) アルコール依存症の家族会

アルコール依存症の家族会においては、依存症に対する理解や患者への対応改善を促すような心理教育的なプログラムが行われることが多い。しかし、アルコール依存症の家族は、長年の患者家族への介護や関りによる心身の疲弊感や慢性化した緊張感を抱えていることが多い。そこで、医療機関で行われている家族会において、会の導入において、身体感覚や感情に焦点化するようなボディワークや弛緩感や安寧感を促進させるようなリラクゼーションを実施することを試みた。これらの関わりによって、家族の無力感や疲弊感を軽減し、その後の体験談の発表における語り方に変化が生じた。脳性麻痺者のリハビリテーションとして開発された臨床動作法はアルコール依存症者や統合失調症者など精神疾患のある人への心理療法として活用されることが多いが、患者の回復を支える家族の健康支援の方法としても有効であることが示された。

また家族会でのリラクゼーションの実施においては、呼吸法の併用なども有効である。呼吸法は集団形式での言語教示での実施が可能であり、家族会などの集団形式の支援での活用が可能である。呼吸法における効果的な教示の検証を行った。

【千ゆう子、川辺裕佳、古賀聡（2023）イメージ教示による呼吸法が気分の変容に及ぼす影響、九州大学総合臨床心理研究 14、25-29.】

(4) 心理劇を用いた家族支援

家族間のコミュニケーションを円滑なものにし、肯定的感情や自己肯定感を高めるためのロールプレイング技法の開発を行った。自分の大切なもの（宝物）を擬人化し、即興劇を通じて、その宝物との対話を試みる「トレジャーズメッセージ」による情動体験の変化について検証を行った。宝物との対話は宝物にまつわる思い出を喚起し、温かな情動や自己肯定感の高まりを支援することが示された。家族支援においては、葛藤や問題に焦点化するだけでなく、家族の肯定的なエピソードに焦点化することも重要であり、家族支援での実践が期待される。家族関係の葛藤を緩和し、よりよい家族関係を構築するためには、家族関係についての知的理解だけでなく、リアルな感情を伴うような気づきが重要である。そこで、即興劇やロールプレイングを用いて家族で生じる葛藤状況を再現し、役割交換法や二重自我法などの心理劇技法を用いながら、家族のそれぞれの立場理解を促すアプローチを試み、その有効性を示した。

【江田朱里、古賀聡、トレジャーズメッセージがもたらす情動体験の検討ー温かな気持ちの生起と日常生活への影響に注目してー、日本臨床心理劇学会第 48 回長崎大会、研究発表、2023 年 2 月】

【杉山みのり、古賀聡ソシオドラマにおける親子関係の理解の深まりー模擬事例を用いたドラマ体験と学びー、日本臨床心理劇学会第 48 回長崎大会、研究発表、2023 年 2 月】

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩男尚美、遠矢浩一、古賀聡	4. 巻 47
2. 論文標題 後弓反張姿勢を呈する重度脳性四肢麻痺児への坐位課題を通した自己身体の認識を促す動作法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 リハビリテーション心理学研究	6. 最初と最後の頁 29~41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 合原弥邑、針塚緑樹、榊原有紀、古賀聡、小澤永治、遠矢浩一	4. 巻 12
2. 論文標題 発達支援における「親の会」活動の試み～思春期女兒の母親グループプロセス～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州大学総合臨床心理学研究	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 針塚緑樹、合原弥邑、榊原有紀、古賀聡、小澤永治、遠矢浩一	4. 巻 12
2. 論文標題 発達支援における「親の会」活動の試みープログラムの試みと保護者の反応ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州大学総合臨床心理学研究	6. 最初と最後の頁 117-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千ゆう子、川辺裕佳、古賀聡	4. 巻 14
2. 論文標題 イメージ教示による呼吸法が気分の変容に及ぼす影響	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州大学総合臨床心理研究	6. 最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古賀聡
2. 発表標題 希望をつなく 新たなる日常と臨床動作法
3. 学会等名 日本臨床動作学会第29回学術大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川沙羅、古賀聡
2. 発表標題 心理劇で示された幼稚園児の創造性と自発性 年少～年長の異年齢混合グループでの試み
3. 学会等名 日本臨床心理劇学会第47回熊本大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江田朱里、古賀聡
2. 発表標題 トレジャーズメッセージがもたらす情動体験の検討ー温かな気持ちの生起と日常生活への影響に注目してー
3. 学会等名 日本臨床心理劇学会第48回長崎大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉山みのり、古賀聡
2. 発表標題 ソシオドラマにおける親子関係の理解の深まりー模擬事例を用いたドラマ体験と学びー
3. 学会等名 日本臨床心理劇学会第48回長崎大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------